

清流

子どもはつまずきの天才

子どもはつまずきの天才である。思いもよらぬつまずきを平気でやってのける。

この言葉は、日本のペスタロッチといわれる教育実践家である東井義雄という方の言葉です。当然のことながらこの言葉には続きがあります。

しかし、子どもは、わけもなくつまずいているのではないようである。子どものつまずきの中に、子どもをつまずかせる「何か」があるようである。

東井先生は、その「何か」にこだわり、その「何か」を取り除くのではなく、その「何か」を予測をして、「何か」につまずいたときに、そこから学ぶことを大切にされた方です。

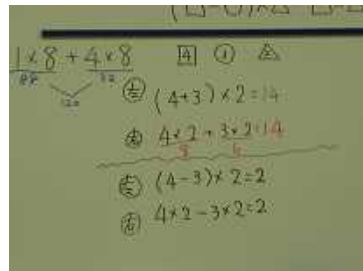
私は出張等がない限り毎日行っていることがあります。それは、全部の教室を回り授業の様子を見ることです。長い時間教室に留まるのではなく、短い時間ではありますが、毎日継続して見て回ります。子どもたちの学習支援をすることもありますが、私にとっては、子どもたちの頑張りと日々の成長を感じることができる楽しい時間になっています。

今日、見て回った教室で次のような場面に出会いました。
【4年生少人数指導教室(算数:分配法則)授業者:清田先生】
黒板には次のような2つの式と答が書いてありました。

$$\bullet (4+3) \times 2 = 14$$

$$\bullet 4 \times 2 + 3 \times 2 = 22$$

清田先生によると、下の式を書いた子どもは自信満々だったそうです。しかし、同じ答になるはずの式の答が違っています。そうです。この子どもは、 $4 \times 2 = 8$ 、 $8 + 3 = 11$ 、 $11 \times 2 = 22$ と前から順番に計算しているのです。私が教室に入ったのは、下の式の子どものつまずきを材料に清田先生が、児童全員の学びを深められている場面でした。右の写真のようにつまずきから先に計算するまわりを確認し、子どもたちと一緒に修正を加えられていきました。この学習により、つまずいていた児童も「そうだった！」と納得した様子を見せてくれました。



そして、最後に清田先生が発せられたのは、「はい、とても良い間違いでしたね。」という言葉でした。「良い間違い」…素晴らしい言葉です。間違いは正解をより確かなものにできる大切な存在なのです。一人の子どものつまずきが、多くの子どもたちの確実な学びにつながった場面といえるでしょう。

冒頭の東井先生の言葉には、まだ続きがあります。

3と3は6だということを、感動をもって分らせる授業をしようと思ったら、3と3は5だとつまずく子どもを大切にすることだ。授業は「つまずいている子」の目玉が光ってくるようなものでないと「つまずいていない子」にとってもたいくつなものだ。

私達教師は、いつもこのような思いを大切に授業を作っていきたいと思っています。